会社責任はありません
悪質、警察介入を企む
明治校区水害

明治校区の水害―鉱害問題で、居住区では三鉱の地連協、居住民代表などで水害対策委員会をつくり、交渉をすすめたことは前号既報の通りであるが、そのご会社は前言をひるがえして〃一切の責任はありません〃と回答してきた。この手ひどい仕打ちにいま居住民のあいだに激しい憤りがたぎり立つている。

第二回の交渉は二十日、市役所第一会議室でおこなわれたが、五時間にわたる交渉のすえ「水害は会社の責任であるので、損害の補償とこんごの対策については地元側の納得のゆくよう誠意をもつて交渉します」との現地交書に調印した。ところが具体的な話合いをするための第三回交渉が二十四日午後二時からおこなわれたが、手のひらを返すように〃責任はありません〃とひらき直る態度にでてきたのである。この日会社はテープコーダを準備し、二台が交渉につかわれた。交渉前に場内に出席した田中稔男代議士の姿をみとめた会社側は「この会議には出席しない」と引上げる一件さえあり、冒頭から波乱した。結局田中代議士は対策委員会の決定で引揚げたが引揚げる途中、場外で会社代表と会うや、その非をなじつたところ会場にあらわれた代表たちは「黙ようされた」とまたもやハイヤーで引揚げようとし、地元側の引止めで交渉にのぞんだ。すでにこのころになると、交渉の経過をききもらすまいと地元民百名近くが会場ちかくにあつまつていた。

正体をついにバクロ

午後三時交渉開始、会社はまず技術上の説明をやつたあと「たしかにポンプはとまつたが、もし動いていてもあの状態では一時間後にはおなじ状態になつていたでしよう。だから会社には責任ありません」と言明するや、会場は騒然として地元民は、あまりの言葉に呆然となり、つづいて激しく憤つた「川の水は海に流れなければならないのに、逆にいまでは海から明治校区に逆流してきている。こういう不自然なことがなかつたら水害は起つていない。そんな馬鹿なことをいうならポンプは引揚げろ」と地元側では反論した。さらに十四日に会社が約束したことについても情勢の変化や内容に疑義があるとして会社はこの約束さえ一しゅうしている。このころになると交渉を心配して地元民も四百名ちかくもふえてきた。

ところがあらかじめ予定していたのか警官も二十名ちかく派出所に待機しており、挑発行為があきらかに察知された。会社も「これ以上ここにいる義務はありません、身の危険を感じますので警察にきてもらいます」と発言するありさまで、あきらかに警察権力を介入させて衝突させようと構えていたこれを知つた対策委では、たたちに戦術を変かん、以後の日程をきめ交渉継続を打出し、二十九日午後一時から交渉をつづけることを会社側に約束させた。

三井の正体をバクロしたこの交渉で地元民の怒りはつよい結束とかわり、保守派の人たちでさえ〃もうだまされまつせん〃と怒りをぶちまけている。

地元の結束固い

二十九日の交渉はこういう情勢のなかでひらかれることとなり、地元側の期待がかけられていたのも大きかつた。ところが昼ごろから降り出した雨のため、会社代表は会場の市役所会議室に姿をあらわさず「大雨注意報が出ていますので警戒のため出席できません」と返事するありさまで、一日仕事や商売を休んで会場にのぞんだ地元代表たち二十名ちかくは、待ちくたぶれてこの返事をきくや、また欺されたと怒り、会社のあくどい引延し作戦に心の底から憤つている。結局この日は浦川県議のあつせんで次回交渉を九月一日にもつことにきまつた。

一方問題が大きくなるや切崩しもさかんにおこなわれているが、地元の結束はますます固まつており最初は保守の人たちは、この運動に反対していたが、事態が進行するにつれて、地元の要求が正しいことを認め一致して立上つている。

足あと

炭鉱といえば社宅を思い出すほど炭鉱と社宅は不可分の関係にある

社宅の歴史をひもとけば、まず官業から民営に変り、納屋（なやゝ）制度から社宅と変り、この変遷の歴史は数限りなく複雑な内容をもつて現在にいたつている。いまの社宅と昔の社宅を較べる場合に納屋当時を引合いにだしてもあまりにも内容の違いがあり、実態がともなわないとおもわれるから、納屋の歴史については別にゆずるとして、ここでは昭和に入つてからの状態といまの社宅をくらべてみよう。

いまの社宅が納屋時代と変つたとはいえ、根本を流れる精神は労務政策の一環として社宅がつくられ、管理されているという点は一貫している。社宅に塀をめぐらし入口には守衛さんがたつていたという状態は、他の社会ではみられない光景であつた。また、総括的に会社は労働者を監視する組織制度をしき、内部的には世話方制度をもうけ、家庭のすみずみまでも監視するよう運営していた。

当時、世話方さんは社宅に居住するものにとつては一面では便利なような存在であつたが反面おそろしく怖い存在だとお互いに感じていた。

まず、出勤の督励から冠婚葬祭の世話、はては社宅営繕の一切の管理を世話方の手にゆだね、しかも、戦時中は配給券もその手に握られていた。

だから世話方と社宅の奥さんとは切つても切り離されぬ状態であつたので、世話方はこのような一切の権力を楯に出勤の督励を強引にやつていた。会社を休むためには世話方さんに届けなければ、あとで怒られる有様だし、黙つて休めばすぐやつてきてやかましくいう。もしいうことをきかねば営繕関係や配給券の方でしぼられるなどガンジガラメにされ、一切を生産に直結するよう監視されていた一体どこの会社に私生活を監視さとくに心配し、嫌つたこともあつた。このような風潮から一時は下火になつていた世話方制度も会社側の立上りとともに復活され権限が強化されてきた。そのもつとも典型的な動きは参議院の山川遵挙のさい顕著にあらわれたことは、全組合員は身をもつて体験した事実である。

実権握る世話方
納屋から社宅まで

そのご、社宅は私生活の場所である、もちろん建物は会社のものであるにしろ監視をおかねばならぬという理由はないということで組合は守衛の全廃を要求、ついに会社は廃止を決意せざるをえなくなつた。それいらい、手をかえ品をかえ世話方制度をますます強化する方向に会社は走つた。たまたま炭婦協の結成をめぐり会社、組合の激しい対立の中に世話方の活動は目にあまるものがあつた。

当時三川では畳の表替えを差別待遇したことで大問題がおこり、会社が陳謝する問題にまで発展したしかしついに炭婦協の結成に成功し、引つづき企闘を闘いぬき世話方制度の撤廃を闘いとつた。

世話方制度の廃止によりはじめて一般の市民なみに私生活の自由を勝とつたわけである。しかも社宅の営繕関係は地域分会が掌握し一切の処理に当つている。いわゆる私生活は自らのものであつて会社の一切の介入を許さないのが現在の社宅環境である。これを考えるときに感無量のものがある。これは決して偶然にできたものではなく、闘いの中から勝とつたことを十分理解すべきであり、組合の力が弱くなれば再び昔の環境に逆もどりするということを認識すべきであろう。

とても判りよい
大島で街録式の報告会

〃あなたの一票はどういかされているか〃とさる二十七日、四山支部大島連合地域分会、主婦会では四山講堂に坂本代議士、矢島参議、坂田市長、酒井県議、橋村、福川浦浜、屋市議を招いて、午後六時から街頭録音式の懇談会をもようした。

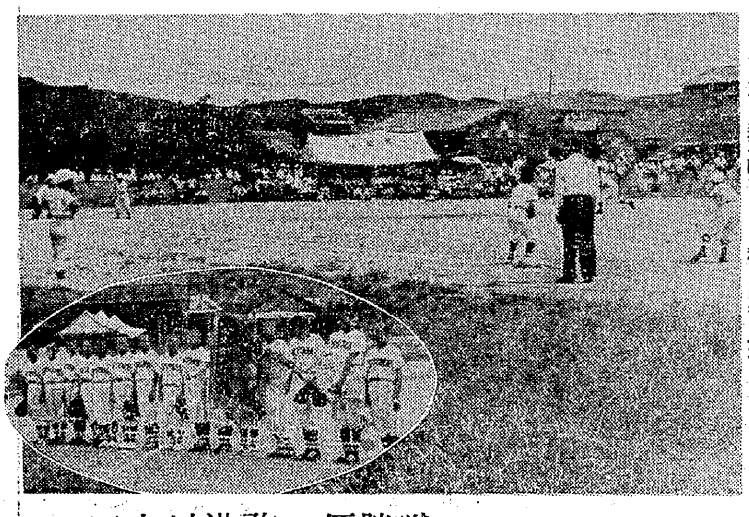
会場正面の壇上に八氏をすえ、会場には組合員、主婦、老人など約七百名がつめかけ、司会者のユーモラスな司会のうちに和気あいあいとしてすすめられた。

会がひらかれる前、あらかじめ各分会からアンケート式の質問をとりよせ、司会者がそれをとりよせて、回答者に指名し、それを回答してもらうという仕組みである。

司会「市長さんはそうとう金もためたので、もうそろそろ八代の方に引きあげるというような噂が社宅の水道端会議でもつぱらですが、この噂はほんとうでしようかそれとも噂を荒尾に埋める決心でもなさつているのですか？ちよつとお伺いいたします」

市長「八代は封建的でどうも私には向かない。私はワンマンといわれていますが、それだけ頑張つているつもりです。どうぞこんどもよろしくお願いします」

といつたアンバイで、ふだんの報告会にくらべて肩のこらないおもしろさのなかに、荒尾市の道路問題、勘評問題、熊本県政の汚職のこと、荒尾市の緑化のこと、市役所の便所のことなど、つぎからつぎと質問もとびだし、具体的な報告や、こんごの対策などが詳細に回答された。



四山対港務の優勝戦（円内は四山チーム）

四山チーム優勝
三鉱少年野球大会終る

恒例の三鉱少年野球大会は、さる二十四日（日）午前九時から三作グラウンドで予選を通過した港務宮浦、本所、四山の四チームの間で行われた。

まず準優勝戦の第一回戦港務、宮浦の戦いは、後半にはいり港務の打棒大いに振い、七対一と宮浦を降した。ついで行われた本所、四山の第二回戦は、前半先取点三点をあげた四山チームが本所チームに最終回一点を与えたたけで三対一とそのまま振り切つた結果、優勝旗は港務、四山の間で争われることになつた。

◇準優勝戦

港務	1	0	0	3	2	1	7
宮浦	0	2	0	0	0	0	2
本所	0	0	0	0	0	0	1
四山	1	0	2	0	0	0	3

◇優勝戦

四山	0	2	0	0	0	0	5	7
港務	0	1	0	0	0	0	1	2

ついで十二時四十五分、割れるような父兄と応援団の盛んな拍手と声援のうちに港務、四山の優勝戦は四山の先攻で開始された。

二回に入り四山は、二塁打、三塁失ヒット、四球、四球と付き出しの一点先取、港務に投手交替をよぎなくさせ、そのあと投手暴投で一点加点して二対〇とリードした。

この変港務チームは、中オーバーの痛烈な三塁打を皮切りに、犠牲バンドで一点を返したが後続できず三、四、五、六回は両軍とも投手戦におわつた。

四山チーム一点リードのうちに試合はいよいよ最終回に入つたが、港務の投手の疲れに乗じて四山の打棒大いに火を吹き、左前ヒット、四球と再び港務をピンチに追いこんで港務に再び投手交替をよぎなくさせたが、そのあとも攻撃の手をゆるめず二塁前ヒット、バンドと妙技をつくして攻め、港務内野陣をかく乱させて一挙五点を上げ、優勝をほぼ確定的なものにした。

これに対し、この変港務チームは右への二塁打、左前ヒットと必死の攻撃に出たが後続できず、一点を得点したたけで、結局七対二と四山が優勝した。

司会者のユーモアにとんだ司会が会場をなごやかなものとしたとおもいますが、ふつうの報告会にくらべて、とても熱心にきくことができ、わかりやすかつた。できますなら、ちよいちよいやつてもらいたいですね。

（写真はその報告会）

投票一番乗り

ここ本所支部大谷建設諸所では、だれよりも小柳氏当選に血高々の二人がいる。それは佐藤覚里さんと小池常雄さんの二人である。

佐藤さんと小池さんは各選挙のさい投票一番乗りとして有名だ。佐藤さんはすでにこんどの選挙までに六回も一番乗りをしており、小池さんは五回の記録をもつている両人とも、こんどの選挙にも四時起床、四時半には投票所についたという。自分が支持する人を、だれより先に箱のなかにポトンと投票するのは何ともいえぬよい気持だそうだ。（左小池、右佐藤氏）

大島連合分会としては、初の企画であり、はたして参加者があるかと危ぶんでいたが、みごとに危惧もふつとばされ、盛況裏に終つた一主婦談 報告会だろうと思つてきましたが、なかなかおもしろくて、政治のこと荒尾市のことがくわしくわかりました。

なんの義

住民は怒る

明治校区では十四日以来の水害にたいし、水害対策委員会を保守・革新一緒になつてつくり、三井鉱山にたいして「鉱害を補償しろ」と要求をおこし、住民闘争を行つている。このほど一人の住民が組合に訪ねてきて

「私ア労働組合が会社にたいしてストライキする気持がよくわかつた。まつたく会社はナツトランです」

と訴えていた。

会社や利権屋の正体は問題がおこるたびにバクロされている。

組合も明治校区の水害にたいしては、地連協を通じて支援することにしている。とにかく、住民の人たちは「貧乏人や弱い者たちは団結せにやならん」と労働組合に強く訴えている。

サービス致します

労働組合本部は、組合員が親しく出入りできねばならない。その点三鉱労組本部は「不親切で、組合員の出入りしにくいところ」という批判があつたので、本部役員一同、会議をひらいた。

メンメン人相の悪いのはいたしかたないとして「事務所に出入りしやすいようにしよう」と机の配置がえを行い、共済会や経理に所用のある人は事務所の中を通らず、直接窓口で用がすまされるように東側の出入口にかわつた。

組合員や家族の人へのサービスはもつともつと考え、親しめる組合にし、自由に出入りできるようにしたいと張切つている。

たゞし、通路の柵が低くなつたため、通る人と頭をゴツン、ゴツンとやるのには大閉口。ご用心、

ワンワンと巡査

大地評傘下の各組合事務所の入口に「警察官の立入りお断り」という立札がかかつている。

これは教組の幹部不当弾圧以来、ファツショ化した警察への労働者怒りのあらわれである。

自労の事務所には「犬、警察官立入禁止」と大きく書いてある。

この文字をみて、幼児のころ父母より「ホラホラ早よ寝んとワンワンの来るよ」とオドされ、なおきかないと「巡査さんの来よらすぞー」といわれたことを思いだすまつたく民主警察のオモカゲはうすれてゆくばかり。「若いオマワリサン」の唄が流行した時代もあつたが……。